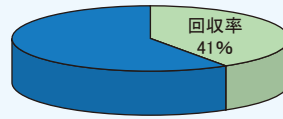
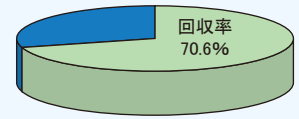


※ 結果の詳細はFD委員会ホームページに掲載しています。http://www.comp.tmu.ac.jp/FD/

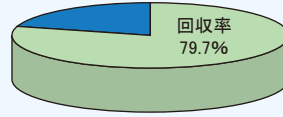
2010年度後期の全学共通科目の授業評価アンケート結果をお知らせします。アンケートの対象者数と回収率は右の円グラフのとおりです。
今回も多く学生の皆さんにご回答いただきました。



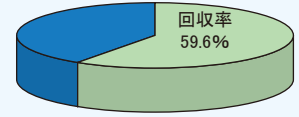
都市教養プログラム
(履修登録延べ数13639名)



実践英語IIb
(履修登録1594名)



情報リテラシー実践IABC
(履修登録547名)

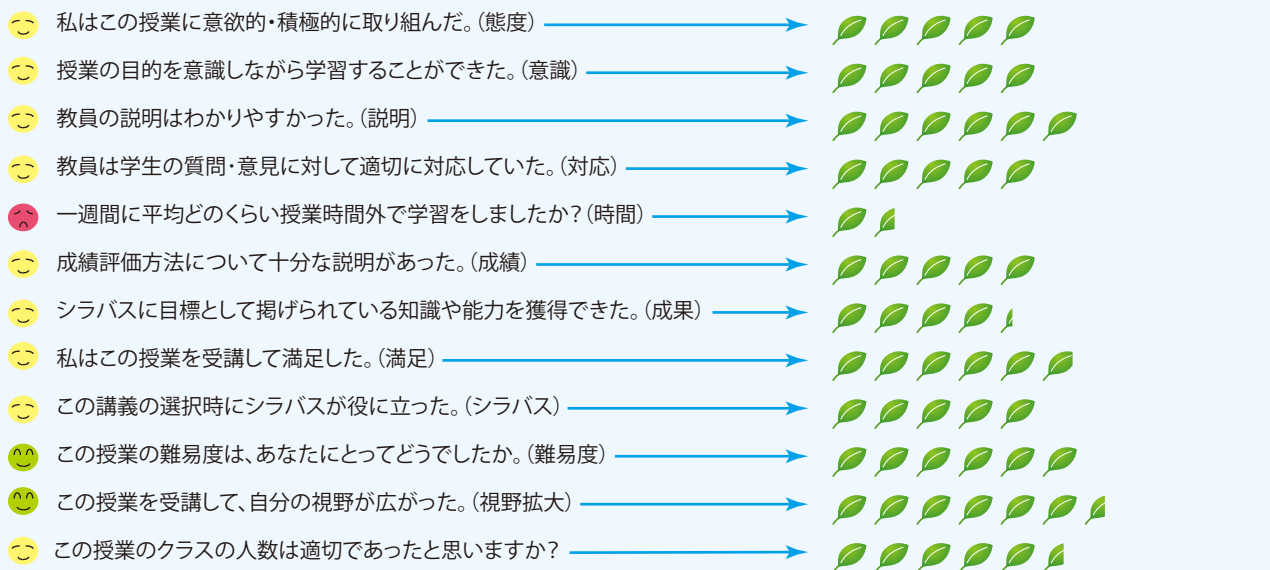


理工系共通基礎科目
(履修登録延べ数4202名)

ご協力ありがとうございました!

※ 調査結果は回答者個人が特定できないような形に処理した上で、FD委員会の責任で集計・周知されるとともに、授業担当者にフィードバックされます。
※ アンケート結果内のグラフは“強くそう思う”および“そう思う”の回答割合を示しています。ただし“時間外学習時間”については“1時間以上”の回答割合を、“難易度”と都市教養プログラム・理工系共通基礎科目の“クラスサイズ”の設問については“ちょうどよい”の回答割合を示しています。なお、質問事項の一部は簡略化しているものがあります。

都市教養プログラム



こんな意見がありました

- 授業内容や成績評価方法がシラバスと大きく違った。
- 受講生の人数に合った大きさの教室を割り当ててほしい。
- せっかく買った教科書を授業でもっと有効に使ってほしい。
- スライドやビデオが上手に取り入れられていたので、講義内容の理解に役立った。

授業担当者から

- 都市教養プログラムの目的が学生に伝わっていないのか、受講生の中には学習意欲が低く授業態度が悪い学生もいる。
- 受講生数が多すぎて、資料の配布・試験の採点・授業目標の達成のいずれも無理がある。
- 学生が関心・興味を持つような身近な題材を取り上げている。
- 学生同士のディスカッションやレポートの毎回提出など、教育効果を高める工夫をしている。

【担当部会からのコメント】 授業目的の理解や達成度において教員と学生の差が大きいので、授業目的が正しく伝わるよう努めていきます。受講生数に関しては学生・教員共に4割が多いと回答しており抜本的な対策が必要です。

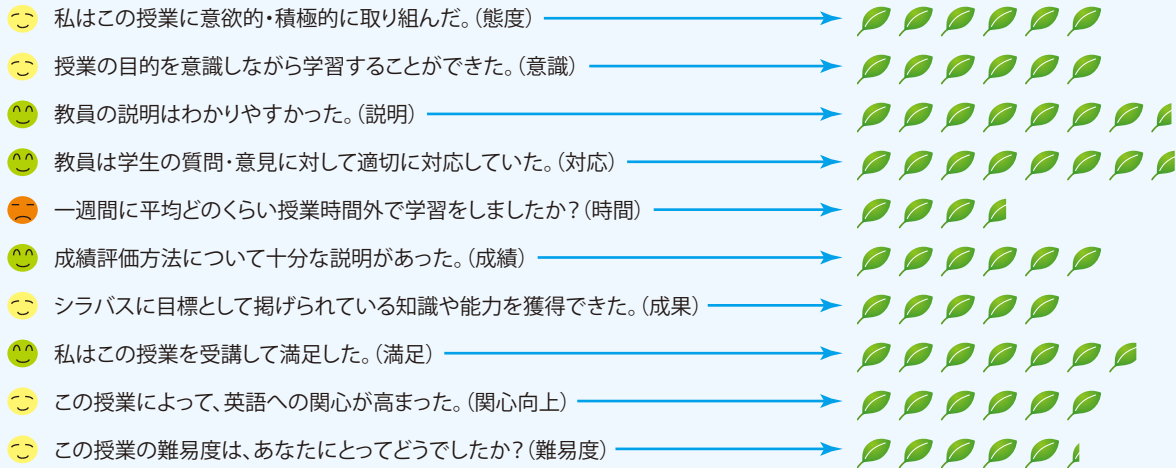
FD (ファカルティ ディベロップメント) とは

起源は、米国にあり、「大学の自己評価機能の開発、個人と組織の教育機能の開発、教員人事機能の適正化の実現、管理運営機能の開発」を含んだ大きな概念とされています。日本では「教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取組の総称」と定義されています。

実践英語 IIb

まだまだ うーん まーまー ニッコ！ キラリ

 0 20 40 60 80 100



こんな意見がありました

- 授業中の時間配分をもう少し考えてほしい。
- ディクテーションの時間ももっとあってもよかった。
- 共通教科書以外の別教材を取り入れてくれたことがよかった。
- リスニング能力が高まるような教材・授業内容だった。

授業担当者から

- 集中力を継続させるためにメリハリのある授業展開が必要と感じた。
- 講義と演習を織り交ぜ、一方通行の授業にならないように心がけた。
- 毎回小テストを実施し、細かく学生の理解度をチェックした。
- 実践的なコミュニケーションの場を提供するために学外・海外からのゲストを招いた。

【担当部会からのコメント】 実践英語 II ab は、選択が希望通りにならなかった場合など、大変さがありますが、英語の学習がこれで終わるのではなく、ずっと続けていく意欲が高まるような授業内容にしていきたいと思います。

情報リテラシー実践 IIABC

まだまだ うーん まーまー ニッコ！ キラリ

 0 20 40 60 80 100



こんな意見がありました

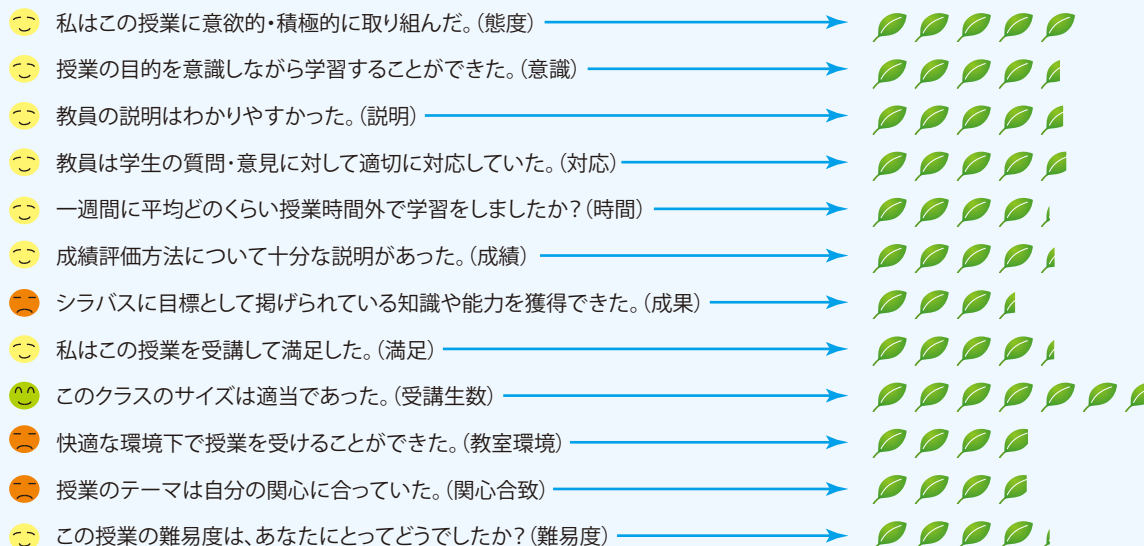
- 課題をもっと多く解きたかった。
- プログラミングの基礎をもっと学びたかった。
- ポスターやイラスト作成、写真の画像編集など実用的なことが学べた。
- 先生やチューターが頻りに巡回してくれ、質問しやすかった。

授業担当者から

- 理系学生と文系学生の基礎知識のバラつきが大きかった。
- 最後にオリジナルのプログラムを作成させた。難しかったようだが達成感があったようだ。
- 詳細なプリントを作成したり、最新のトピックスを採用したりして学生の関心を喚起した。

【担当部会からのコメント】 アンケート結果からは、皆さんが熱心に授業に取り組んだことがうかがえます。授業時間外での学習については、十分とはいえない結果だったので可能な限り実践の場を多くして、定着を図るようにしてください。

理工系共通基礎科目



こんな意見がありました

- もう少し計画的に授業を進めてほしい。
- なぜこれを学ぶ必要があるのかを少しでもよいので説明してほしい。
- クラスの人数が多すぎる。
- Web ページにノートや宿題・解答をアップしてくれてよかった。

授業担当者から

- 学生の学習意欲を高めることが課題。
- 数学の基礎学力の不足が深刻であるが、対応に時間が取れない。
- 今学んでいることと、専門との関連を意識させるようにした。
- 実例を多く用い、演習を増やして説明もわかりやすくした。

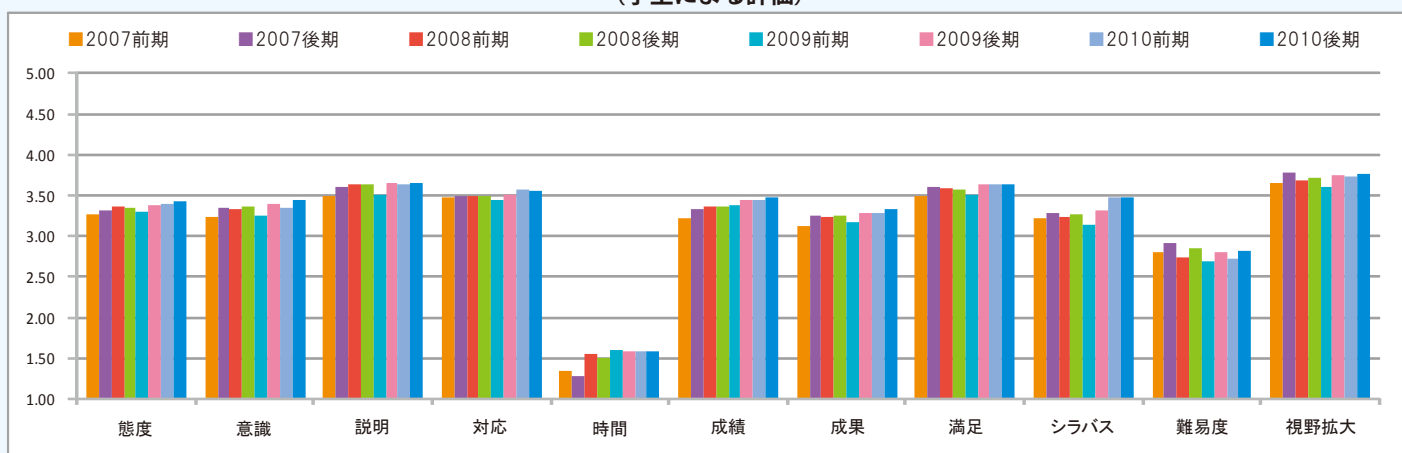
【担当部会からのコメント】 22年度前期に引き続き、学習時間が21年度よりも減少してしまいました。22年度前期ではアンケート結果と受講者数との間に明らかな相関が見られたので、今後も解析を続けて対策を検討します。

経年変化 (2007-2010)

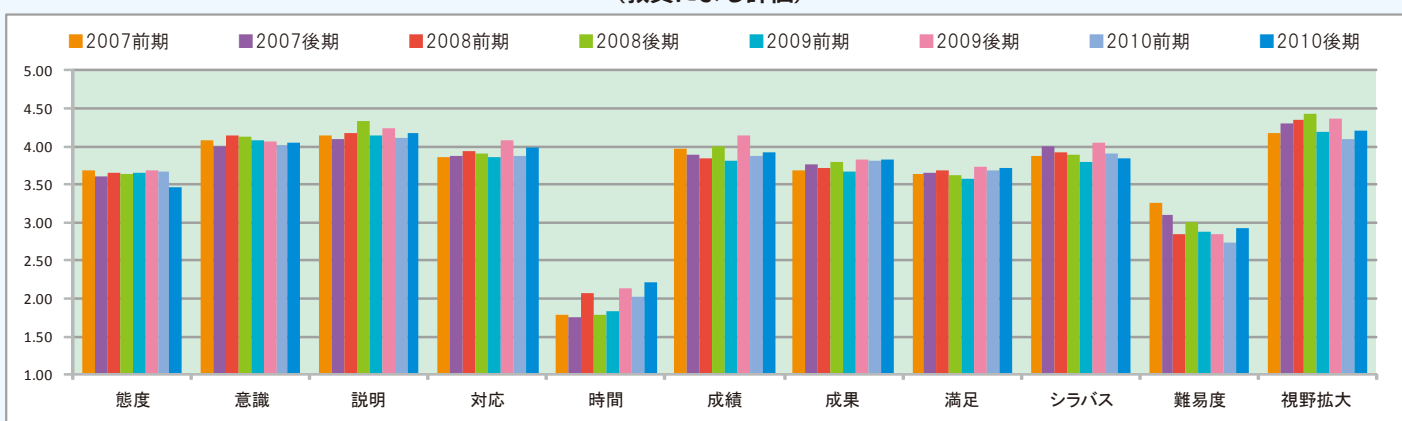
グラフの値は、〈5. 強くそう思う 4. そう思う 3. どちらとも言えない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない〉とした時の全体平均値。ただし、「時間」は、〈5. 2時間以上 4. 90分程度 3. 1時間程度 2. 30分程度 1. ほぼ0時間〉とした時の全体平均値。「難易度」は〈5. 易しかった 4. やや易しかった 3. ちょうどよかった 2. やや難しかった 1. 難しかった〉とした時の全体平均値。

都市教養プログラム

(学生による評価)

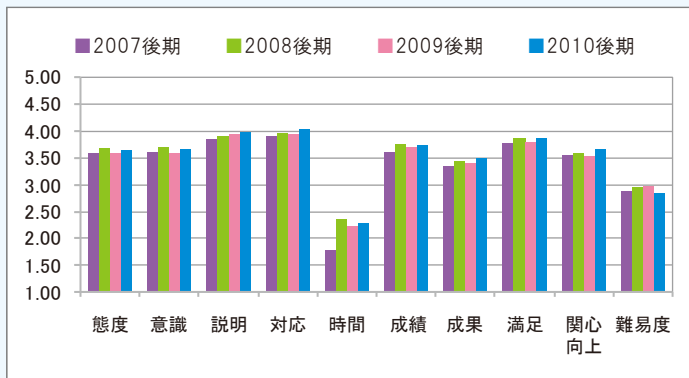


(教員による評価)

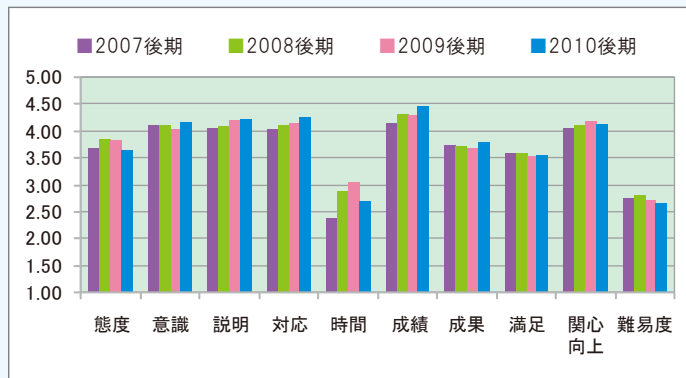


実践英語 II b

(学生による評価)

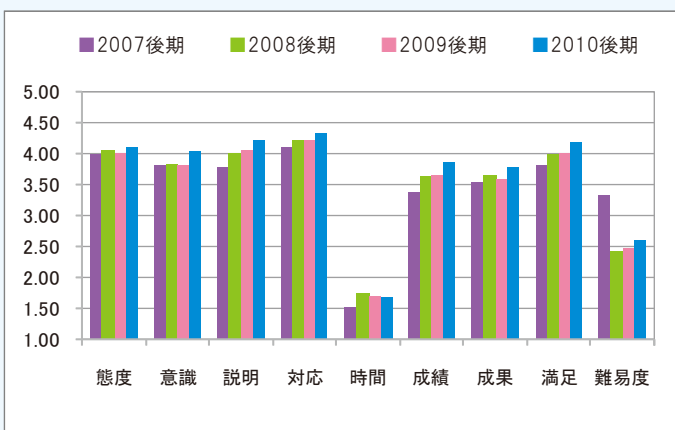


(教員による評価)

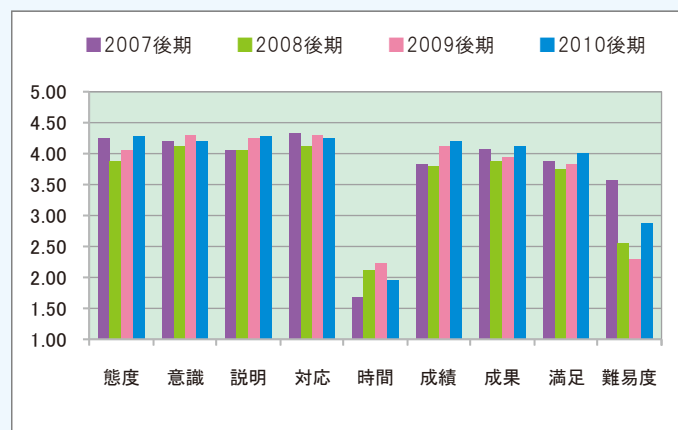


情報リテラシー II ABC

(学生による評価)

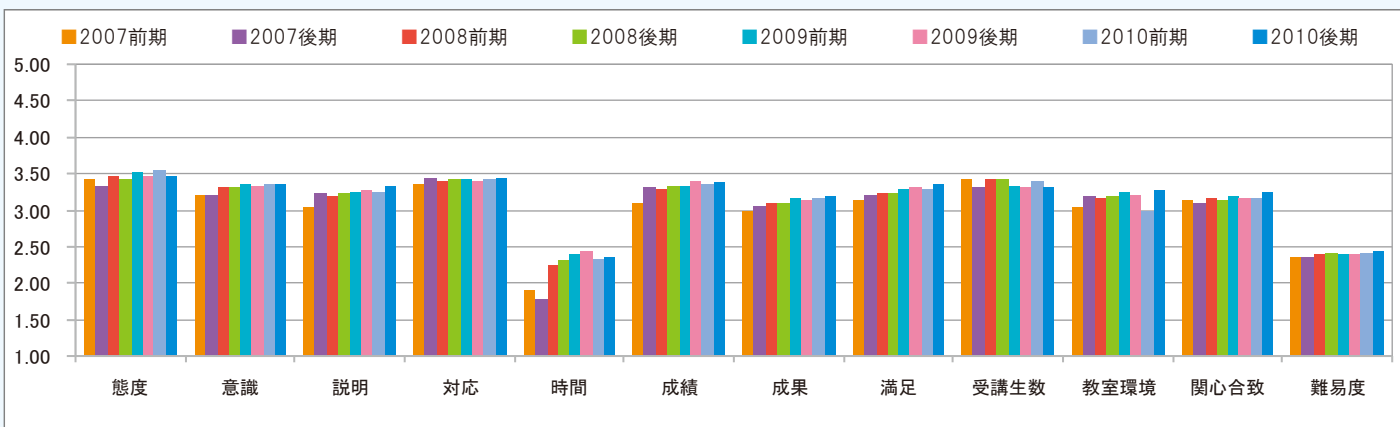


(教員による評価)



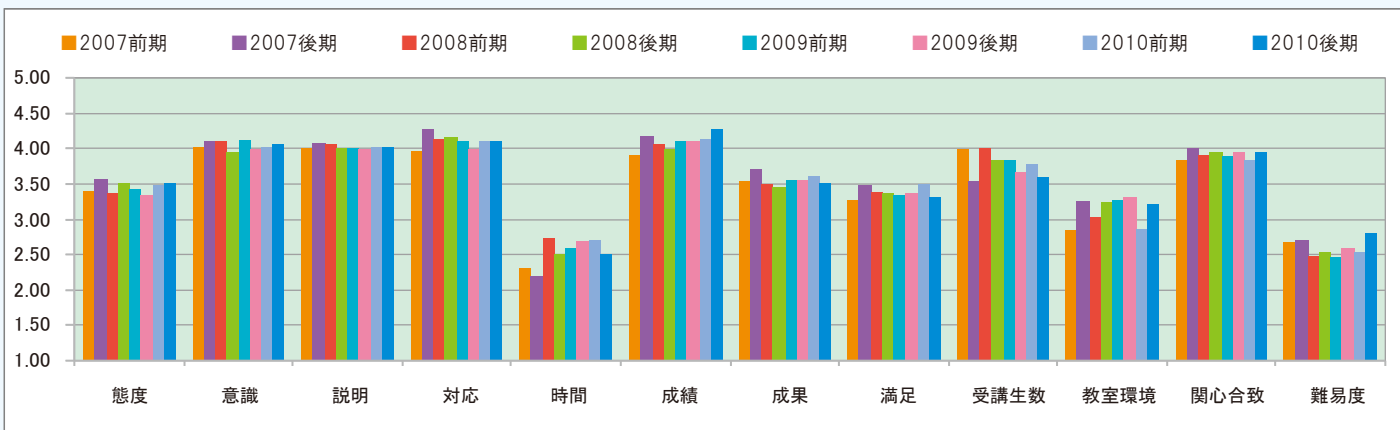
理工系共通基礎科目

(学生による評価)



「受講生数」は〈5. 多かった 4. やや多かった 3. ちょうどよかった 2. やや少なかった 1. 少なかった〉とした時の全体平均値

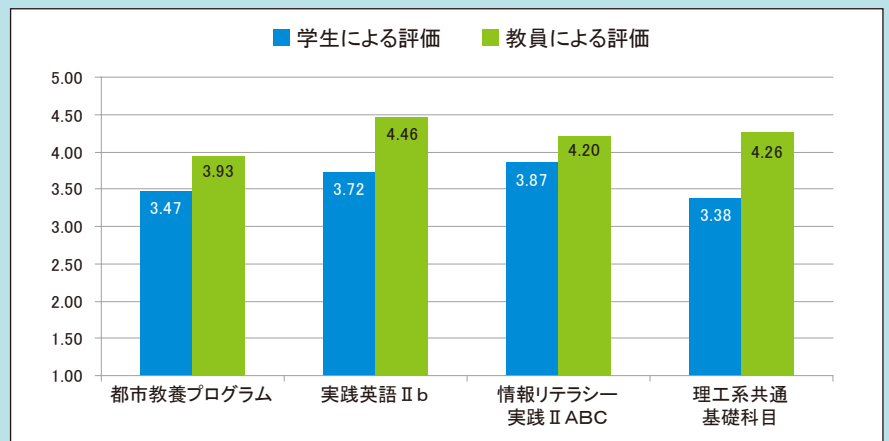
(教員による評価)



「受講生数」は〈5. 多かった 4. やや多かった 3. ちょうどよかった 2. やや少なかった 1. 少なかった〉とした時の全体平均値

- 皆さんの多くは、卒業後も「評価」から逃れられません。就職すれば上司から仕事の成果を評価されます。会社であれば、何が評価されるかによって社員が何に頑張るかが違ってきます。個々人の売上高は、比較的容易に客観的な評価ができますが、それしか評価されないのなら、チームワークが難しくなるかもしれません。他方、チームワークで誰がどれだけ貢献したかの評価は簡単ではなく、主観的になってえこひいきといった不満が出てくるかもしれません。
- 大学の成績評価も基本は同じです。期末試験だけで評価されるなら、公平かもしれませんが、毎回の授業でのグループワークやディスカッションなどに積極的に参加しようという意欲は少し薄れるかもしれませんね。一方、授業での皆さんの活動ぶりが評価されるなら、何がどう評価されるか明確でないと不満が出てくるかもしれません。評価の幅広さと客観性とは、あちら立てればこちら立たずの関係にあります。会社であれ大学であれ、完璧な評価はないのです。
- 世の中に完璧な評価はないからこそ、より良い評価を目指して、あらかじめ評価の方法や基準を明示しておくことが大切なのです。教員が皆さんに何に頑張ってもらいたい（どんな力を身に付けてほしい）と期待しているのか、頑張った成果がどう公平に評価されるのか、あらかじめ知っておくことは、皆さんの意欲と学習成果の向上に直結するのです。また、授業担当教員にとっても、アンケートを通じてこうした状況を知ることが授業の改善に役立つのです。

「成績評価方法についての十分な説明があった」 （平成22年度後期授業評価アンケート集計結果）



〈5. 強くそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない〉とした時の全体平均値

首都大学東京では授業評価アンケート結果を基に様々な教育改善を行っています

本学では平成17年の開学以来、FD委員会を中心に、授業評価アンケートの結果等を基に様々な教育改善に取り組んできました。平成22年度に行った主な改善例ををご紹介します。

- 基礎ゼミナールでは、過去数年間のデータをもとに、学生の希望が集中している曜日の開講クラス数が多くなるように配慮しました。
- 都市教養プログラムでは、シラバスへの成績評価方法の明記を徹底させるようにしました。
- 実践英語では、NSE授業での補助教材を本格的に使用開始しました。
- 情報科目では、高校までの情報の知識を把握し、今後の授業の参考とするためにレディネス調査を実施し、分析を行いました。
- 理工系共通基礎科目では、平成22年度前期の授業評価アンケートにおいて、受講生数と評価の相関関係を分析し、授業改善に向けた検討を行っています。
- 時間割のレイアウトを変更し、より見やすくしました。また、都市教養プログラムの大規模クラスへのTAの配置を実施しました。

「別冊クロスロード」（第4号）の編集を終えて

『別冊クロスロード』も3年目に入りました。本号では少しページを増やし、過去4年間の授業評価アンケートの経年変化を、担当教員の自己評価と共に掲載しました。個々の授業評価アンケート結果は各担当教員に通知されますが、ここで示した結果は各教育プログラムで平均したものですので、顕著な変化は出ないかもしれません。しかし全体的に見ると、わずかながら皆さんの評価が上がっている項目が多く、素直に嬉しく思います。一方で、評価が低いまま低迷している項目や、下がっている項目もあり、引き続き授業改善に向けた取り組みを続けていきます。

別冊クロスロード 2011 年春号（第 4 号）

編集・発行 首都大学東京 FD 委員会

【FD 活動や教育改善に関する皆さんの声をお寄せください。】

連絡先：教務課教育支援・評価係（内線 1036）

e-mail : fdwww@tmu.ac.jp

